JUGEND PHIL

in Fukushima 2018

ごあいさつ

本日は、ユーゲント・フィルハーモニカー 第2回福島公演にご来場くださいまして、誠にありがとうございます。

昨年8月、当団は初めて福島で演奏会を開催しました。手探りで作り上げた初の福島公演には不安も多くありましたが、福島の皆様は我々を心から温かく迎えてくださいました。1年の時を経て、我々は再び福島のお客様にお会いできる日を心待ちにして練習に励んで参りました。音楽を通じて生まれた皆様との繋がりに感謝するとともに、素晴らしい音楽のひとときをお届けできれば幸いです。

さて本日は、ソリストに福島市出身のピアニスト結城奈央さん、バンダパートには福島県立橘高等学校管弦楽部の金管セクションの皆さんをお迎えし、ロシアの作曲家による傑作をお送りします。素晴らしい共演者の皆様とユーゲントフィルが織りなす競演にどうぞご期待ください。

最後になりましたが、ソリストの結城さんをはじめ、演奏会にあたりご協力いただいた地元福島の多くの皆様、そしてご来場いただいた皆様に心より御礼を申し上げます。今後とも当団の活動に対してご愛顧を賜りますよう、どうぞよろしくお願いします。

ユーゲント・フィルハーモニカー 代表　湯田怜央奈

プログラム

D.ショスタコーヴィチ：祝典序曲 作品96

S.ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 作品18

—休　憩—

P.チャイコフスキー：交響曲第6番『悲愴』作品74

指 揮＝**安斎拓志**　　独 奏＝**結城奈央**

※開演中は携帯電話の電源をお切り下さい。
※他のお客様のご迷惑となりますので、演奏中のお席の移動はご遠慮ください。

［指 揮］ **安斎拓志**（当団音楽監督）

福島県二本松市出身。3歳よりピアノを故大内洋子氏に師事。福島県立福島高等学校管弦楽団でヴァイオリンを始め、これまでに木全利行、篠崎史紀の両氏らに師事。全日本高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演に3年連続で参加。立教大学交響楽団においてコンサートマスターを務める傍ら、故佐藤功太郎氏の勧めで指揮活動を始める。故小松一彦、河地良智、橘直貴、田中一嘉、時任康文、海老原光の各氏らのアシスタントコンダクターを務め研鑽を積む。卒業後は桐朋学園大学、国内外のセミナーにおいて学び、これまでに指揮を故佐藤功太郎、河地良智、秋山和慶、黒岩英臣、湯浅勇次の各氏らに師事。2006年にユーゲント・フィルハーモニカーを創設。2012・2013年には嵐のコンサート「アラフェス」のオーケストラと合唱を指揮するなど、クラシックの枠にとらわれない様々な活動を展開している。

［独 奏］ **結城奈央**

福島県福島市出身。東京藝術大学音楽学部器楽科卒業後、渡独。国立ベルリン音楽大学ハンス・アイスラーを最高得点で卒業。第18回カルレット国際ピアノコンクール、および第17回ブラームス国際コンクールピアノ部門優勝。2008年より故郷福島で室内楽コンサートを定期的に開催。2010年にベルリン・スタインウェイハウスでリサイタルを開催。2011年の第21回福島市古関裕而記念音楽祭、2012年の「ふくしま文化の光フェスティバル」にゲスト出演。東日本大震災後、東京で定期的にチャリティーコンサートを行い、売上金を福島市に寄付。その他、日本・ドイツ・スペイン・ニュージーランドにおいてソロリサイタル・ピアノコンチェルト・室内楽コンサートを開催。これまでにピアノを手塚真人、田邊融、故三浦洋一、岡野寿子、佐藤俊の各氏に、室内楽を岡山潔、コンラート・リヒターの両氏に、歌曲伴奏法をコンラート・リヒター氏に師事。2016年9月の福島でのリサイタルを収録した2ndアルバム「あの日のために」を同年12月に発売。現在、演奏活動の他、各地でのレクチャーコンサートや後進の指導にも力を入れている。

曲紹介

1）D.ショスタコーヴィチ：祝典序曲 作品96

ショスタコーヴィチはスターリン政権下におけるイデオロギー統制の時代を生きたロシアを代表する音楽家である。その作品は時に政治的な批判や弾圧を受けており、正しく歴史に翻弄された作曲家の一人といっていいだろう。

本日演奏する祝典序曲は1947年8月に十月革命の30周年を記念し作曲されたがこの時には発表されず、1954年に第37回ロシア革命記念日の祝典のためにソヴィエト共産党中央委員会からの委嘱作品として改作され発表された。

構成は伝統的なソナタ形式となっているが、内容を見ていくとショスタコーヴィチの作品の様々な旋律が散りばめられている(冒頭の華々しいファンファーレはピアノ作品集「子供のノート」、第1主題の木管楽器による軽やかなメロディはオラトリオ「森の歌」からの引用である)。そして時折垣間見える諧謔的な喜びはいかにもショスタコーヴィチらしい音楽だ。

後半に登場するバンダ(金管の別働隊)には福島県立橘高等学校管弦楽部の金管メンバーを迎えてお届けする。福島の若者たちによる溌剌とした輝かしいハーモニーをお楽しみいただければと思う。

（櫻岡 唱）

2）S.ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 作品18

今日ピアノ協奏曲の中でもとりわけ頻繁に演奏されるこの曲は、ラフマニノフ28歳の時の作品である。この時彼は、自身の交響曲第1番が酷評にさらされ、ひどいスランプに陥っていたが、この協奏曲の初演で成功を収めると、見事に立ち直りこの後、交響曲第2番やピアノ協奏曲第3番などの名曲を生み出していく。

ピアニストとして彼は、20世紀前半最高の名手の一人に数えられるほどに、一流の腕を持っていた。彼は自ら演奏するための曲を多く作曲したが、それらは皆かなりの名人的技巧を必要とする。

本日演奏するこの協奏曲も大変な技巧を必要とするわけだが、ただピアノ一辺倒でないところが、この曲が長らく愛されている理由の一つであろう。例えば第一楽章冒頭ではピアノは完全に伴奏であり、そのうねるようなアルペジオの上を、情緒豊かな主題を弦楽器が分厚く歌い上げる。ユーゲントが最も得意とする楽想である。他の理由として作曲技法が完璧なことがあげられる。とりわけ対位法の完成度、そして管弦楽法の見事さが特筆に値する。オーケストラとのバランスもよく、古今の多くの協奏曲を弾いてきた演奏家ならではの経験も生きている。

彼の作曲スタイルは決して過去の範疇から出ることはなかったが、古き良き時代の手法を踏襲し、そこに独創的な楽想と情緒を盛り込むことに成功している。作曲家としても彼は一流だったのである。

（市川 徹）

3）P.チャイコフスキー：交響曲第６番『悲愴』作品74

まず最初に申し上げておきたいのは、この交響曲の標題が『悲劇的』でも『絶望』でもなく、和訳で『悲愴』であるということです。

チャイコフスキーはこの交響曲を自身の最高傑作と讃賞しながらも、多くを語り残すことなく、初演から僅か9日後に人生を終えました。自害であったか病死であったか、テーマは何か、鎮魂、或いは遺言であったか。有識者たちが史実や背景をもとに数多の神話を送り出していますが、唯一つ確かなことは、文字通りチャイコフスキーが命と引き換えに伝説の作品へ昇華させたという事実のみです。

私がこの福島の地にいた頃、多くの大人たちから「君たちのような若い人にこの曲は分からない」と言われた事を思い出します。それから十余年が経ち、半人前ながら自分も大人となった今、この曲が何たるやを分かっていた(つもりであった)高校生の頃より、この曲が分からなくなりました。寧ろ確信めいたものを描いていたかつての自分を褒めてやりたいくらいのもので、そしてこうした事態がまさに『悲愴』にあると、今は感じています。

全編に渡って散りばめられた有り余る甘美な旋律、舞踊、行進曲。数々の名曲を想起させる要素で構成されたこの交響曲は、紛れもなくチャイコフスキーがそれまでの創作を綴った自伝であり、すなわち自身の人生そのものが最高傑作であったと讃えるこの上なく自己肯定的な作品です。過去が『悲愴』であったのではなく、現在がドン底であるから究極に美化された過去が姿を見せ、愛おしみ、無様な現状でさえも納得できる、これほど慈悲と救済に満ちた音楽はありません。

大量消費される音楽のように架空の第三者である「キミ」を愛するよりも、ジョン・レノンがヨーコを歌ったように、極めて自己的な表現こそ聴き手の想像力を奮い起こし、真相への欲求を掻き立てます。チャイコフスキーが辿り着いた深淵は解り得ませんが、深い悲しみがもたらす追懐、呼び醒まされる現実への憤激、自己解放と途方もない憧憬。自問自答が繰り返される50分の間に、聴衆の其々が強烈に共感するドンピシャの一瞬があり、人類にとって普遍的な情感そのものが題材であるからこそ、難解でありながらも歴史を超えて愛されている名曲なのです。

今回は奇しくもロシアの歴史を遡るような演目となりました。圧政から解放された天才と、躁鬱を乗り越えたヴィルトゥオーゾ。そしてロシア産業革命の夜明け、ある偉大な芸術家が披露した自画自賛は、老若男女を問わず各々の到達点から見える人生を激しく肯定します。すべてを聴き終えた後には「素晴らしい人生だった、もう死んでもいいや」と思うかもしれません。若しくは「明日からもまた素晴らしい人生を送ろう」と思うかもしれません。できれば後者となることを願うばかりです。

さあ、どうぞプログラムは脚元に置いて、最後の沈黙が皆様の心を吸い取るまでユーゲントフィルの快演をお楽しみください。そして今日、この交響曲とオーケストラのファンが一人でも増えていただけたのならば、私にとってこれ以上の幸せはございません。　　（伊藤雅也）